

(勁草書房・3465円)



しのだ・ひであき 1968年
生まれ。広島大学平和科学
研究センター准教授。

「国際立憲主義」を考察

藤田英朗著

「国家主権」という思想

国家主権は、古くて新しい課題である。一方には、国家主権を尊重する思想があり、他方には国家主権を制限して国際社会全体の利益を追求する思想がある。この二つの思想は絶えず論争を繰り返してきた。しかし、冷戦終結とともに国家主権の限界が露呈し、国家主権を克服しつつ国際社会の調和を目指すことが人類共通の利益として再認識され始めている。世界的な経済不況、地球環境の悪化、途上国の紛争や貧困といった地球的課題を想起するとき、国家主権を超えた国際社会の視座には説得力がある。

そこで本書が提起するのが「国際立憲主義」である。著者はアメリカ、イギリスにおける主権概念の変遷を踏まえながら、国家主権を制限する「国際立憲主義」の成り立ちを論じている。近代初期の古典的立憲主義時代(1章)、19世紀の国民国家時代(2章)、国際連盟(3章)、戦間期(4章)、米ソ冷戦(5章)、1970年代以降の国際社会秩序の形成(6章)、ポスト冷戦期の現在(7章)と時間軸に沿って国家主権の変容を検討しているのである。すなわち、従来通り国家主権を維持するか、それとも主権を制限して世界的な問題解決に向かうのかと問い、後者の重要性を強調している。16世紀から21世紀にかけての主権思想の変遷をわずか300ページ余りで記述しているため物足りなさは否めないが、国家主権と国際立憲主義という二つの潮流の角逐を俯瞰する上では有益である。

確かに国際立憲主義は人類の輝かしい成果なのかもしれない。しかし、それを許さないような現実もまた存在している。韓国大統領の電撃的な竹島訪問、香港の活動家たちの尖閣上陸は記憶に新しい。私たちは依然として国家主権という枠組みで思考している。国家主権と国際立憲主義とは二者択一の問いではなく、むしろ問題領域ごとに柔軟な対処が必要なものかもしれない。それ故に、国際立憲主義に対しては評価が分かれるであろう。しかし、本書の提起する論争的な課題は、国家の意味を再考する上で一読の価値がある。

(九州大准教授・政治学 大賀哲)